

ろより、佐渡島正吉などいへる太夫もありし名残とみゆ、これそのみにもあらず、男寵の流行し故に、後までもかやうの名を付るなり、されど太夫にはあらず、みなはしかうしの内なり、勝山が奴風の行はれしも、此故なり、箕山云、近年傾城の端女に、若衆女郎と云あり、先年祇園の茶屋に龜といひし女、姿かたちを若衆によく似せて、酌を取たり、され共是遊女ならず、是のみにて斷絶しぬ、若衆女郎の初る處は、大阪新町富士屋といふ家に、千之助とて有、此女は、初は葎原町の局にありしが、おのづから髪短く切てあらはし居たり、寛文九己酉年より、本宅の局に歸りて、さかやきをすり、髪をまきあげにゆひ、衣服のすそみちかく切、うしろ帯をかりた結にし、懷中に鼻紙たかく入て、局に著座す、よそほひかはれるしに、暖簾もかへよとて、廊主木村又次郎がゆるしを得て、暖簾に定紋を付たり、紺地に鹿の角を柿にて染入たり、是若衆女部の濫觴なり、見る人めづらしといひて、門前に市をなす故にこゝかしこに一人づゝ、出来るほどに、今はあまたになり、堺奈良伏見の方迄ひろまれり、是衆道にすける者をおびき入むの謂ならん歟、されども、よき女をば、若衆女郎にはしがたし、それに取合たる顔をみ立てすると見ゆ、大阪の若衆女郎は、外面よりそれとしらしむる爲に、暖簾にかならず大きな紋を染入るといへり、洛陽集、青簾あはれなるものや柿暖簾有和

百造

名岐

〔嬉遊笑覽九娼妓〕百ざう、徒流云、中ごろ江戸町貳丁目の河岸迄下品の遊女ありける、小部屋やうの店にて、二軒打抜に行燈一ツを用ひたり、俗に百ざうといひける云々いへり、ざうとは何の義にか、思ふに、豆藏などの例にて、房州の方言に、寄居虫ガウナを、がなざうと云、又蟹にもくざうの名あり、陽物をさくざうといふも同じ、人の名めかしていふ事なり、坊と云ふこと、似たり、

〔二中歴一三能〕遊女

主水 乙阿古 宮城 小鳥 白女 小乙 阿古 観音 小観音 山殿 如意 香爐 仲駒